経営と牛の命 そして、人の心を繋ぐ

岩手県立盛岡農業高等学校 動物科学科　3年　大芦 和生

「家畜は人間の利益のために飼養されているいわゆる経済動物である。でもな、俺はおまえにそう思っては欲しくない。経済動物でも、命を助ける。助けている以上は、全力でその命と向かいあえ。救えなかった命のためにも、成長し続ける源としろ。」

ある日、私が見ていたテレビ番組での言葉です。先輩獣医師からの教えや現場勤務で日々奮闘し、成長していく新人獣医師の姿を追った番組でした。その一場面で、乳熱により起立不能となった乳牛を新人獣医師が手をかけましたが、救うことができず、廃用となり無力で送り出すことしかできなかった時に先輩獣医師が言った言葉でした。この言葉で、私も酪農後継者としての目指す目標が見えてきたような気がします。

私の家は、岩手県北部、「やませ」で知られる久慈市夏井町で酪農を営んでいます。祖父の代に、周囲の仲間とともに山地を開拓して始めたそうです。現在は、父が経営していますが、父も、「使えないからもういらない。」その考えだけは持ちたくないと思い生活してきました。力及ばず廃用となった牛を見て「こいつ、助けてやりたがったなぁ。すげぇべごだったんだぞ。うちで昔、チャンピオンになったんだ。」牛の顔をこすりながら笑顔で「ありがとう。」と言っていた父の姿はとても悔しそうでした。

利益を上げ、生活していくには何かをしなくてはいけませんが、私の家ではそれが家畜であるということ。「家畜に愛情を持ってはいけない。」という人もいますが、我々は人間です。自分が育てているもの、いつも一緒に居るものに情を持つのは当たり前だと思います。情と言ってもただかわいいだとかではなく、その生き物を育てる。そして送り出すことが生産者の責任であり、最も忘れてはいけないことだと思います。それをすべて含めての情です。将来は実家の経営を大きくし、たくさんの牛を導入して稼ぐ事が目標ですが、経営と牛の命、命のあり方について考え直し、その命の最期をどのようにすればその生物にとって良いのだろうか。私はよく考えたりします。その疑問を先生に問いかけた際、「それについて答えは無いんじゃない？ どう考えるかは人それぞれだと思うし、とらえ方も人それぞれだと思うぞ。」とおっしゃっていました。確かにそうだと思いました。

私は、昨年の夏休み、北海道の牧場に２週間の長期インターンシップに行ってきました。北海道の酪農を少しでも体験してみたい、ということで希望し、研修を通して多くの事に驚き、目で見、身体で感じることができました。畜産共進会の見学、ミルキング・パーラーでの搾乳の仕組みや、フリーストールの除糞、治療の手伝い、ストールの掃除を行いました。パーラーに感動し、初めて薬を調合し与えました。また、牛が立てなくなるまで薬を打って、それでも乳生産する現場や利用価値が無くなると廃用となる現実も目にしました。利益を

上げるためには、犠牲にしなければならないことも分かるが、そのために苦痛があってはならない。強く感じました。将来の自分にとってすごく刺激となりました。どのように施設・設備を整えるか、乳牛の飼育管理はどのようにするのかなど将来を見据えて考えていく必要があると思いました。規模を大きくすることだけでなく、牛の命とどのように向き合っていくのか、利益だけを求めるのではなく、命についても深く考えさせられました。多くのことを吸収し体験することができました。

学校の授業に「畜産技術」があります。そのなかで、畜産における農業生産工程管理（GAP）について学習する機会がありました。2020年の東京オリンピック・パラリンピックをひとつの目標として、食材供給等、海外からのお客様に対応するために必要となってくるとのことでした。その畜産物の要件のひとつに、快適性に配慮した家畜の飼養管理があり、「アニマルウェルフェア」の考え方に対応した飼養管理指針に照らした措置が必要であると学びました。「アニマルウェルフェア」への対応で最も重視されるべき点は、施設の構造や設備の状況ではなく、日々の家畜の観察や記録、家畜の丁寧な取扱い、良質な飼料や水の給与等の適正な飼養管理により、家畜を健康に飼育することです。元々は、欧州からのもので、「飢餓と渇きからの自由」「苦痛、障害又は疾病からの自由」「恐怖及び苦悩からの自由」「物理的、熱の不快さからの自由」「正常な行動ができる自由」などの観点があります。この授業から、私が感じていたことそのものだとびっくりしました。牛が生きている間は、誠心誠意つくして快適に過ごさせる。それが、生産者としてできる牛の命を尊ぶ事だと思いました。

利益を上げる・得ることで、利用されている命があり、それを行っている生産者・関係者がいること。これが農業だと私は考えます。利益だけを求めれば成功するかもしれませんが、それだけでは儚く、脆いものでひとつの失敗で崩れ落ちるのではないでしょうか。そんなことはしたくない。それが私の思いです。だから私は経営と牛の命と人の心。この三つのバランスのとれた酪農をすると強く決意しました。あのテレビ番組と父の一言が私の酪農の姿を大きく良いものへと導いてくれたと思っています。

私がこれから目指す酪農の姿。それは牛を尊び感謝するということ。そして、今まで酪農を行ってきた方々へ、尊敬の心を忘れず、経営の向上と命の関わり、そして人の心。この三つを繋げた体制を作り上げることを目標として、この目標実現ができると信じ、これからの高校生活を送りたいと思っています。そして、高校卒業後は父とともに酪農をするとともに、盛岡農業高等学校特別専攻科に入学し、家畜人工授精師と受精卵移植師の資格を取得、多くの酪農家の視察研修を行い、それらを経営に生かして行きたいと思っています。また、現在母は、岩手県の牛飼い女子会に参加して県内の牛飼いの方々と交流を行っています。母とも協力し、もっともっと酪農の良いところを消費者そして酪農を知らない方々にも知って

いただけるようにすばらしい牧場を作り上げて行きたいと思います。必ず成功させます。
この夢に限界は無いと思っています。常にさらなる高みを目指していきたいと思います。